



教育改革もオールジャパン体制で臨んでいきたいと下村文部科学大臣

第二部の懇親会では、文部科学大臣教育再生担当大臣、東京オリンピック・パラリンピック担当大臣の下村博文氏が登場した。

下村氏はオリンピック招致に関する裏話も披露しつつ、現在進行中の教育改革についても展望を語った。

「大学入試を学力一発勝負で可否を決めてよいのか。社会に出てからは、組織をまとめるリーダーシップや企画・創造をするクリエイティブ能力、思いやりや優しさといった人間的感性も求められます。そうした能力を今の大学入試では求めています。大学入試制度を変えることは、大学制度を変えることになり、高校以下の処遇も大きく影響を受けると思われます。

オリンピック招致もオールジャパンで成功しました。東京オリンピックは

私塾・私学・企業 教育ネット要覧  
出版記念祝賀会開催

# 下村博文文部科学大臣を迎え 盛大に出版を祝う

2013年9月22日(日)

アルカディア市ヶ谷

私学会館

主催 全日本学習塾連絡会議

全日本学習塾連絡会議は同会発行の「私塾・私学・企業 教育ネット要覧 第13集」の出版の出版記念祝賀会・報告会・懇親会が9月22日(日)、アルカディア市ヶ谷にて開催された。第一部には記念講演、続く第二部では下村博文文部科学大臣が挨拶を行うなど、私学・塾関係者が一堂に集う盛大な会となった。

## 「塾教育」が 世界の言葉に なる日を夢見て

第一部の報告会は、全日本学習塾連絡会議代表幹事の坂田義勝氏の開会の辞からスタート。

次に来賓として、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課、民間教育事業振興室長の楠目聖(あきら)氏が登壇。続いて大阪教育大学英語教育講座教授の加賀田哲也氏が挨拶に立った。

加賀田氏は、今回の記念講演者であ

る須原秀和氏の学会発表資料の英文翻訳を担当。「須原先生は子どもたちに対してインストラクターではなく、父親として接しています。父親と子どもの信頼関係が構築されている塾だと感じています。これまでの塾は学校教育を補完するものでしたが、その補完を超えている塾だと思います」と話した。

## 「塾教育」 実践報告と今後の展望

記念講演  
須原英教教室 塾長 須原 秀和氏



「塾教育」を学力や社会モラルの低下改善の「切り札」として、広く社会に認識してほしいと須原氏

9月14日に開催された国際教育学会第8回公開シンポジウムにて、京都大学湯川記念館で学会発表を行った須原氏。今回は記念講演として、当日の発表をもう一度再現してくれた。

須原氏は「塾教育」を「家庭教育」「学校教育」「社会教育」に準じる第4の教育カテゴリーとして定義。家庭と学校、社会のそれぞれの教育の連携が希薄になっている今、塾教育はそれらを有機的に連結でき、学力低下、社会モラルの低下を食い止め、改善できる「切り札」のひとつと成り得る存在として、広く社会に認識してもらいたいと考えている。

須原氏は学会への出席を決心した動機について、塾関係者を前に熱い思いを語った。

「学習塾百年の歴史」の中で、塾研究の世界的権威であるジュリアン・デイルケス氏が原稿を寄せられています。私は塾に携わる者として、先生の研究に感謝と敬意を表しております。

しかし、デイルケス氏は冒頭に「塾の存在はよくないものだ。しかし、それはどうしようもないという言葉に揶揄されるように、いまだにやや非合法でうさん臭い匂いがするの事実である」と述べておられます。しかし、これは一部の事実かもしれませんが、すべての真実ではありません。私は35年間、非合法なこともうさん臭いこともやってきた覚えは一度もありません。皆さんもどうですか。一度もないでしょう。

私のような研究者でもない塾講師が学会に出たら、失笑を買いかもしれない。しかし、このまま塾が誤解されたままではやりきれない。それが学会での発表を決めた理由です。

これまで縁の下の力持ちとして、日本の教育を支えてきたのは塾ではありませんか。塾の存在がなければ、学力低下やモラルの低下はもっとひどいことになっていたことは、火を見るより明らかです。もうそろそろ縁の下から出てきて、もっと太陽の光を浴びたいのではないかと。そうした思いを学会発表にぶつけたつもりです。

塾教育 = Juku School Education の単語が世界で通用する日が来ることを、私は願っています」

## オリンピックと同じ オールジャパンで 教育改革を

単に発展途上国的な土木工事の公共事業ではなく、文化教育の視点で成熟国家として目指すものは何かを考えたいと思っております。教育改革も同じように日本人一人ひとりが『明日がある。チャンスや可能性は広がっている』と思えるよう、オールジャパン体制で臨んでいきたいと考えています」と力強く話した。

最後に「学習塾百年の歴史」「教育ネット要覧」編集長の佐藤勇治氏から

お礼の言葉が述べられた。

「学習塾百年の歴史・塾団体五十年史」は、当初の予定を上回り、1,170ページにもなり、学習塾の歴史を残すことができました。これも今日ご出席いただいている皆様のお力添えのおかげです。そして今年、教育ネット要覧第13集発刊に当たって、下村大臣に巻頭文を書いていただきたいとお願いをしました。皆様のご声援もあつて巻頭文が実現し、本日の祝賀会を下村

大臣ご列席の下、開催できましたことを本当に感謝しています。ありがとうございました」

この後、佐藤氏には花束が贈られた。総合同会である松田邦道氏から「2020年の教育ネット要覧第20集まで編集を続けるご決心を」と呼び掛けられると、「はい」と力強く答えていた。

祝賀会では私学・私塾の関係者が大勢駆けつけ、温かいお祝いの挨拶を述べていた。



下村文部科学大臣を囲んで3組に分けての集合写真